

日本消化吸収学会創立40周年記念
特定非営利活動法人日本消化吸収学会創立記念
シンポジウム

主 催

日本消化吸収学会・特定非営利活動法人日本消化吸収学会

開催日時

2011年2月13日(日) 9:40～12:00

開催会場

大手町サンケイプラザ(東京都千代田区大手町1-7-2)

Program

プログラム

9:40 ~ 9:50	理事長挨拶 荒川 泰行 NPO 法人日本消化吸収学会理事長
	司会●三浦総一郎 NPO 法人日本消化吸収学会副理事長
9:50 ~ 10:15	特別講演1 栄養素輸送システムと食品機能 武田 英二 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部臨床栄養学分野教授
	司会●畠山 勝義 新潟大学医歯学総合研究科消化器・一般外科教授
10:15 ~ 10:40	特別講演2 腸管不全 (Intestinal Failure) の病態 腸管粘膜免疫の病態と腸管腔内要因の観点から 藤山 佳秀 滋賀医科大学内科学講座・消化器内科教授
	司会●松枝 啓 医療法人社団さくらライフクリニック院長
10:40 ~ 11:05	特別講演3 加齢と消化器 高齢者における、肥満と大腸癌の関係について 宮坂 京子 東京家政大学教授
11:05 ~ 11:15	休 憩
11:15 ~ 11:50	功労者表彰式典
	司会●中村 光男 NPO 法人日本消化吸収学会副理事長
11:50 ~ 12:00	閉会挨拶 三浦総一郎 副理事長

栄養素輸送システムと食品機能

腸管の糖は、刷子縁膜のSGLT1とGLUT5、および基底膜のGLUT2により、管腔から血中へ輸送される。糖吸収活性は、低体温、過食、妊娠、授乳、炭水化物摂取などの生理的条件で変動する。加齢により刷子縁膜控訴活性およびSGLT1発現量は低下し、糖吸収活性は低下する。消化管での炭水化物の消化吸収に影響を与える因子として、消化速度、食物形態、調理方法、澱粉の違い、 α アミラーゼ阻害剤、移動時間、繊維・脂質・タンパク質量、等がある。ゆっくり吸収される糖質は代謝障害の病態や治療に有効と考えられる。それによりインクレチンやインスリン必要量および遊離脂肪酸合成が抑制される。消化吸収されにくい炭水化物は結腸で細菌による醗酵を受け、ガスや熱とともに短鎖脂肪酸が生成され、pHは低下し、病原微生物を阻害し、胆汁酸の溶解度を下げ、ミネラルの吸収を上げる、等により健康に影響を与える。このように腸管の糖吸収と健康は密接な関係を有している。



武田 英二 (たけだ えいじ)
国立大学法人徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・教授
生体システム栄養科学部門・医療栄養科学講座・臨床栄養学部門

1974年	徳島大学医学部医学科卒 医学博士
1974年	同医学部附属病院医員 (小児科)
1975年	高松市民病院医師 (小児科)
1978年9月	米国インディアナ大学医学部研究員 (実験腫瘍学)
1981年5月	徳島大学医学部助手 (小児科)
1986年6月	同医学部附属病院講師 (小児科)
1989年4月	同医学部講師 (小児科)
1992年2月	同教授 (病態栄養学)
1999年10月	栄養学科長 (2001年10月まで)
2003年10月	徳島大学病院「食と健康増進センター」長 21世紀COE「ストレス制御をめざす栄養科学」拠点リーダー
2004年4月	国立大学法人徳島大学大学院・教授 (臨床栄養学部門)
2009年4月	栄養学科長 現在に至る

腸管不全は、“a condition characterized by the inability to maintain protein energy, fluid, electrolyte, or micronutrient balance owing to gastrointestinal disease when on a normal diet”と定義されるが、狭義にはHPNあるいは小腸移植を必要とする病態を指す。欧州でのHPN施行腸管不全症例の集計では、基礎疾患ではクローン病、原因としては短腸症候群が最も多く、腸管慢性炎症の制御が腸管不全の予防・管理には重要な課題の一つとなっている。わが国のクローン病患者数は急速に増加しており、衛生環境、食生活の変化を背景とした腸内細菌叢の変容が要因の一つと考えられる。実際、tRFLP法を用いたクローン病腸内細菌叢プロファイルは健常人とは明らかに異なったクラスターを形成する。一方、腸管粘膜免疫反応はこれまでTh1-Th2 paradigmの中で論じられクローン病はTh1優位の病態と捉えられてきているが、最近になって、慢性炎症あるいは自己免疫疾患の病態に関与するTh17/T reg paradigmが提唱され、またinflammasomeの概念からIL1ファミリーの免疫応答を捉えるなどの進展がみられる。クローン病の治療は抗TNF α 製剤の登場により大きく変貌を遂げようとしているが、その病因・病態は依然として解明されていない。今後、腸内細菌叢と宿主腸管粘膜免疫応答の相互作用に関する新たな展開が期待される。



藤山 佳秀 (ふじやま よしひで)
滋賀医科大学内科学講座・消化器内科教授

1973年	京都府立医科大学卒業
1977年	滋賀医科大学医学部助手・内科学第二講座
1988年	滋賀医科大学医学部講師・第二内科
1989年	文部省在外研究員・米国コロラド大学医学部
~1990年	
1994年	滋賀医科大学医学部助教授・内科学第二講座
1999年	国際協力事業団ケニア感染症研究対策プロジェクト：フェーズII、
~2000年	プロジェクトリーダー
2002年	滋賀医科大学医学部内科学講座教授 (消化器内科) 現在に至る

食物を摂取し消化吸収して、それを日常のエネルギー源として用いる (代謝) ということは、ヒトを含め動物の基本的な営みである。JDDW2009特別講演にて、これまでの実験動物を用いた結果から、生理的条件を超えるような (悪) 環境や刺激に対しては、老齢動物は適応できなくなることがあるが、日常生活において必要とされる消化・吸収・代謝機能は、加齢によって大きく低下することはないこと、しかし、摂食調節は、老齢動物において、負の側に傾いていることを報告した。

一方、現代社会は、運動不足と栄養過多による肥満と生活習慣病の増加が問題とされている。カロリー制限が、小動物の寿命を延ばすことは周知の事実となり、アメリカではヒトにおいてもそれを証明しようとする試みが始まろうとしている。一般的な感覚として、高齢者に肥満者は少ないという印象があるが、実際にそうなのかを、比較的元気な高齢者で検討したところ、80歳を超えると、BMIが低下し、肥満に関連する2種類の遺伝子多型の分布とBMIは相関しなくなった。大腸癌は肥満がリスクとされているが80歳を超えると、加齢そのものがリスクになっていると考えた方がよいと思われた。



宮坂 京子 (みやさか きょうこ)
東京家政大学教授、医学博士

1974年	東京医科歯科大学卒業、医籍登録番号第223451号 第一内科入局
1979年	カリフォルニア大学サンフランシスコ校、生理学、Postdoctral Fellow
1981年	テキサス大学サンアントニオ校、消化器・栄養学、Research Instructor
1983年	東京都老人総合研究所、研究員、
1993年	東京都老人総合研究所、研究室長
2008年	東京家政大学栄養学科教授 現在に至る

腸管不全 (Intestinal Failure) の病態

腸管粘膜免疫の病態と腸管腔内要因の観点から

高齢者における、肥満と大腸癌の関係について

加齢と消化器

日本消化吸収学会創立40周年
特定非営利活動法人日本消化吸収学会設立記念
功勞者表彰式典

式次第

一、開 式

一、功勞賞状及び記念品贈呈

一、挨拶

一、閉 式

※閉会挨拶後、会場にて記念写真を撮影します。

功勞賞受賞者一覧

名誉会員 ● 青柳 利雄
朝倉 均
岩崎 有良
梅田 典嗣
小幡 裕
勝 健一
川島 祐
城所 侑
笹川 力
高橋 恒男
竹本 忠良

土屋 周二
中川 滋木
中澤 三郎
丹羽 寛文
馬場 忠雄
星 猛
細田 四郎
正宗 研
武藤 輝一
森 治樹
吉田 豊

功勞会員 ● 秋山 俊夫
荒木 駿二
稲田 雅美
大隅 正子
小野 良樹
片山 洋子
金澤曉太郎
木村 修一
桐生 恭好
斉藤 昌三
佐藤 薫隆

信田 重光
杉村 文昭
染谷 一彦
高瀬 幸子
武内 俊彦
中村 孝司
福島 恒男
松本 泰二
村上 義次
山中 正己
山元 寅男

(五十音順)